
少年の詩（風の翼編）

柴田 亨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年の詩（風の翼編）

【Nコード】

N3183A

【作者名】

柴田亨

【あらすじ】

今年の夏に、ちょっとした冒険をしました。これは、その時の日記を小説にしたものです。こんなに長い文章書いたのは初めてなので、読みづらと思います。・・・よろしくお願いします。（^^）；

出発前夜

「少年の詩」

1、出発前夜

僕は高校3年生、もうすぐ夏休みが終わる、そしてまたいつものような部活とテストをくりかえす学校生活が始まるはすだった・・・。

始業式の日、僕はカバンをリュックにかえ、自転車のかわりにバイクに乗って家出をした。そしてとりあえず西をめざした。

家出をしようと決めた理由は話すと長くなるのでまたの機会しようと思うけど、きっかけは「海辺のカフカ」という一冊の本だった。
(村上春樹著 新潮文庫)

カフカという15歳の少年が東京中野区の家を出て、四国の高松にある図書館で暮らすようになるという物語なのだが・・・、話の内容は冒険談ではなく哲学的？でとても難しく、僕にはよくわからなかった。

でもとりあえず15歳の少年が家出をしたんだから、17歳の僕にできないはずはない。

ずはないという軽いノリで家出を決めたのだった。

だけど僕は小さいころからボーイスカウトをやっていたから、キャンプ生活にはある程度自信があった。

でも今回はあの時のように、山に入って2泊3日で帰ってくるような夏のキャンプではなかったら、荷物の準備には慎重に慎重を重ねた。

まず、出発の二日前にバイトの貯金を全部下ろしてきてそれを盗

難防止のために2つの財布に3万ずつ入れ、残りの3万をリュックの背当ての中に隠した。

今持つてるお金も合わせると、全部で9万5千236円にもなった。それからキャンプの7つ道具である（僕の場合）、ナイフ、懐中電灯、コッフェル、テント、救急箱、防寒服、地図とコンパスを用意し、机の上に並べてみた。

そしてそれに、いつもなら山で薪を集めて燃料にするから必要ないのだが、街中で焚き火をするわけにもいかないし、何しろ煙の匂いがついた体でコンビニに入りたくなかったので、折りたたむと分厚い文庫本ぐらいのサイズになる携帯用のガスコンロを買っておいたのを付け加えた。

あと生活するもので必要なものは何か考えた結果、頭のなかで必要順位トップ3にランクインされた、食料と雨具とロープになり、それ以降にランクインされた物たちは持っていないことにした。なぜなら、僕のバイクはアメリカンタイプで、シーシーバー（後ろに乗る人用の背もたれで、クッションがついてなくて銀メッキの長い棒だけが突き出ている）に80リットルの大きくて背の高いリュックを縛り付けると後はテントぐらいしか積載できないからだ。

よくアメリカンライダーがリアタイヤの両サイドにつけている黒い皮製のバッグは思いのほか高かったので買うことができなかった。

まず食料は家にあるレトルト食品を片っ端からかき集め、それにイワシの缶詰と砂糖とクリープも入っているスティック状のインスタントコーヒーを加えて、スーパーのビニール袋に入れた。

僕は以前からよく荷物をパッキングするときにはこのビニール袋を使う習慣があった。なぜなら、破れたらかさばらないように小さくたたんでおいた物と取り替えればすむし、スーパーのおばさんに頭をさげればいくらでも無料で手に入ったからだ。

そして口を蝶結びのできそこないのような結び方で縛っておくとリュックが雨でびしょ濡れになっても中身の被害がほとんどないことを経験から学んでいた。

つねに身体をさらしているバイク乗り（ライダー）にとって、「雨」は、違反した車両からお金を巻き上げようと躍起になっている白バイ警官と同じぐらい厄介な存在なので、雨具は、上下が別々になっているゴワテックスの良いものを持って行くことにした。

それはわりとかさ張るから他の着替えの服を減らさなければならなかったけど、真夏を少し過ぎたばかりの蒸し暑い時期だったから、防寒着をもたなくて良いことが幸いした。

ここまでそろえると、旅の相棒たちは机の上には乗りきらず、僕の部屋の狭い床いっぱいまで広がっていたから、はたしてリュックの中に入るのかどうか心配だった。

パッキングの際は、普通リュックを背負ったときに、重心が背中から肩の辺りに来るようにするために、軽い物や使用頻度の少ないものを下層部にいれ、重いものや使用頻度の多いものを上層部にいれるのだが、バイクの安定性を保つために、できるだけ重いものをリュックの一番下にくるように配置することにした。そして自分の生活に必要な物はすべてその中に入った。

だけど、人間は最低限生きていくことができるようになると、また別の欲求が生まれてくるようにできているらしい。

荷物の中にCDと本が入っていないことに気が付くと、お湯を沸かしっぱなしで買い物に出かけてしまった事に気が付いたような気持ちになった。

でも大きなリュックにはもう荷物は入らなかったし、それとは別のリュックをバイクにくくりつける方法が思いつかなかったから、息抜きのために一階に紅茶を飲みに降りた。

時刻はもう夜の9時を回っていた、急がなくてはそろそろ両親が帰ってきてしまう。

そして、ふと明日から学校へ行く人間の部屋に大きなリュックが置いてあるのを両親に目撃されて言い訳をしているイメージが浮かんでしまったので、お湯の中にティーパックをいれたまま二階に戻り、とりあえず押し入れの奥に押し込んで布団をかけておいた。

そして階段を降りながら、明日の朝どのように出発するかということに考えを廻らせてみた。

父は朝早く出勤してしまうから問題はないのだけど、母は8時半にならないと仕事にいかないというのが悩みどころだった。

台所にもどると、紅茶はすでにコーヒーのような色になっていた、明日のことを考え続けながら無意識のうちに砂糖をたくさん入れていたらしく、ポットに3人分作ったものを一人分の量になるまでひたすら煮つめたような味がした。

そしてそのぶつ濃い紅茶を啜っているうちに、大きなリュックの他に、普段使っているリュックを積載する方法を思いついた。なにも、使える部分は表だけではないのだ。

それは、まず運転席の後部座席に大きなリュックを載せ、長さが70cmあるシーシーバーにロープでぐるぐる巻きに固定し、その裏側になるリアフエンダーの上にテントを固定して、さらにそのテントの上に小さいリュックを置くというものだった。口で説明するのもややっこしいのだが、後日実際に積んでみると、積むだけで5分はかかってしまう面倒な作業になった。そこで小さいリュックの方はロープで固定せず、カラビナを使っ取り外しができるように工夫した。

そうすれば小さいほうのリュックに貴重品や、よく使うものを入れて街を歩くときにはずして持つていくことができる、テントと大きいほうのリュックはそのままバイクに縛り付けておいても今時盗む人もいないだろう・・・。

そんな事を考えていると、玄関の鍵を回す音が鳴って、「ただいまー」という良く透る甲高い声が聞こえた。先に帰ってきたのは母だった。

「おかえり、遅かったね、今日も患者さん多かったの？」と、僕はあるだけいつもと声の調子が変わらないように注意しながら尋ねた。

「いやーもう七十三人も来たわよ、インフルエンザの季節でもないのに、なんでこんなに多いのかしら、まだ開業してから1年ちょっとでしょ、渡辺先生が働きすぎなのよ・・・」

母の口数が多い時にはたいがい疲れていることが多かったのだ、僕はできるだけ明るく振舞って夕食の準備をはじめた、といったもたいした料理ができるわけではないし、この時は昨日母が作った豚のしょうが焼きの残りとポテトサラダがあっただので、僕は冷蔵庫の残り物で味噌汁を作っただけだった。

母は薬剤師で渡辺先生という小児科医が開業した病院のとなりの薬局に勤めていて、その先生の病院が非常に繁盛していたので母も薬局も必然的に忙しくならざるをえなくなったのだった。

渡辺先生という人は、あまり人あたりが良いほうではなかったし、診察が丁寧というわけでもなかったけど、この先生に任せておけば大丈夫だと感じさせる

何かオーラのようなものが出ている人だったから、きっと「それ」が開業して1年足らずで多くの患者さんを集めたのだろうと思った。もしかしてある種の人間は、物理的には存在しないのだけど、人間どうしの間だけで影響し合うオーラのようなものを本当に持っているのかもしれない・・・。

夕食を食べ終わって、片付けをする頃になって父が帰ってきた。

「ただいまー」と言って夕刊を持って居間に入ってくると、いつものように新聞だけPCラックの上に置いて、着替えのために2階に上がっていった。

3人とも食事を終えると父が皿を洗いながら、

「お、そういえばお前、明日から学校じゃないか？夏休みの宿題は全部終わったのか？」と聞いてきた。

彼は今まで僕の学校のことについてまったく気にもかけていないようだったから、何か感づかれたのかと思って一瞬どきとしたけど

「え！まあ、一応全部終わってるよ。あんまり多くなかったからね。」と、平静を装って言った。

それに、全部終わっているというのは、ウソではなかった。

父は皿を洗い終わると「一応って・・・大丈夫なのか？」といってまた2階に上がっていった。おそらく仕事が忙しいのだろう、うちの家族は主に母が一人でしゃべっていたから、僕らはふつつ必要最低限の会話しか交わさなかった。

そしてこの日、唯一僕が家出をする計画を建てていることを知っている兄は家に帰ってこなかったから、彼とふたりで使っている部屋でぐっすりと眠った。

あるいは兄は僕に使わせないために友達の家にも泊まってくれたのかもしれない。

きつと、ぐっすりと眠れたのは、明日から、17年間ほとんど変わらなかった日常がまったく別のものになってしまうなんていう実感が無かったからなのだろう・・・。

僕は、のんきな夢の中を彷徨っていた。

2、迷子

翌日は旅の始まりを歓迎してくれるようにとてもよく晴れていた、僕はいつもどおり朝食をとって制服に着替えると、「いつてきます」といって家を出た。

今は、朝の7時45分だから、母が出勤するまでの45分間どこかで時間をつぶせばいいのだ。そして、家にもどり荷物をバイクにくくりつけ、あとはエンジンをかければよい。

僕はとりあえず、いつもの駅まで歩いて電車に乗った。

車内はいつものように満員で、いつもの人々が疲れた顔で、憂鬱そうに目的地に向かっていた。

もしこれから家に帰って、バイクに乗って旅に出てしまったら、きっと両親に迷惑がかかるし、学校でも問題になるだろう。

それはかなり混迷を極めた前代未聞の騒ぎになるだろうことは容易に想像できた。

でもこのまま学校に行けば、いつもどおり何事も無く一日が終わり、そこそこ頑張ってテストをこなし、大学に進学し、兄のようにあまりやりたくも無い仕事をし、ドラマとはかけ離れた恋をして結婚し、家庭を築いて子供を育てあげ、年老いて死んでいくのだろう・・・僕は、そんな平凡な人生はいやだ！と思っていた、

だけどその時、ふと、病気も交通事故も知り合いの不幸も無く、そんなにうまく人生が送れたらこんな幸せなことはないのではないか、ということが頭に浮かんだ。

でもそれは純粹にそう感じたのではなくて、たぶん家出をするという無謀な計画をまえに、日常生活から脱線してしまうという恐れが、なかば逃避という形でそのような概念を生み出したのだろう。

そんなことを頭の中でぐるぐると回していると、突然少し昔の口ツクのリズムがあたりから聞こえてきた、ブルーハーツの「ライン

を越えて」だ。

そしてそれが僕にしか聞こえないことがわかるまでしばらく時間が
かかった。

1ヶ月前にMP3プレイヤーを買って、ほとんど毎日のように身に
着けていたから。すでにイヤホンと耳は一体化し、何かを耳につけ
ているという感覚はなかったからだ。

ヴォーカルの声はただひたすら真っ直ぐだった。

色んな事をあきらめて 言い訳ばかりうまくなり
責任逃れで笑ってりや 自由はどんどん遠ざかる
金が物を言う世の中で 爆弾抱えたジェット機が
僕のこの胸を突き抜けて 危ない角度で飛んで行く
満員電車の中 くだびれた顔をして
夕刊フジを読みながら 老いぼれてくのはゴメンだ！

生きられなかった時間や 生きられなかった場面や
生きられなかった場所とか 口に出せなかった言葉
あの時ああすればもつと 今より幸せだったのか？
あの時ああ言えばもつと 今より幸せだったのか？
机の前に座り 計画を練るだけで
一歩も動かないで 老いぼれてくのはゴメンだ！・・・

E A R T S

T H E B L U E H

「ラインを越えて」

より

彼らの詩は僕の心を強く動かした。こころのキーがまわりエンジ
ンに火がともったのだ。

そして、ちょうど隣の駅で電車の扉が開いた。

もう迷いはなかった、大勢の名前もしらない人々を掻き分けて必死

でホームにでた。

振り返ると心地よい音を立てて日常という扉が閉まっていくなが見えた。

もう後戻りはできない！

隣の駅から歩いて家に帰ると、時刻はもう9時すぎだった。

母は間違はなく仕事に出かけているはずだけど、やっぱり何がおこるかかわらないので、こっそりと裏庭にまわり、家の中の気配をさぐり、誰もいないことを確認した。

「なんだか泥棒になった気分だ」と僕は思った。

ピッキングを想像しながら裏庭の玄関の鍵をあけ、無事に家の中に入ると、とりあえず台所にいつて水を飲んだ、さっきから心臓がバクバク鳴りっぱなしだった。泥棒の仕事も楽ではなさそうだ・・・

こんな状態ではあまり長居をしていたら疲れてしまうから、急いで2階に上がり、あらかじめ押入れの中に隠しておいた80リットルのリュックと小さいリュックとテントを担いでガレージに向かった。幸いガレージは家の中でつながっていたし、シャッターも閉まるので、近所のおばちゃんに学校をサボっていることについて詮索されずにすんだ。

そして、すべての荷物をバイクにしっかりと固定すると、何かの儀式のように神妙に、深呼吸をしてからキーをまわした。ガレージの中にVツインエンジン特有の、低くリズムカルな鼓動が響き渡った。

僕はヘルメットをかぶり、MP3プレイヤーの再生ボタンを押し、シャッターを開け放つと、果てしなく広がる世界へ向かって飛び出した。

夏の日差しがただひたすら眩しかったし、クソ暑いんだけど嫌な気分はしなかった。

運転のために、音を最小限に抑えたイヤホンからは、静かにケツメ

イシの「ドライブ」が流れていた。

暫らくすると地元の住宅街をぬけ、国道246に出た。ここはかなり太い幹線道路だから、バイクの運転をはじめて3ヶ月の僕には、まだ少し不安があった。

信号が変わると慎重にアクセルを吹かして、クラッチをつないで発進して、立体交差の傾斜を駆け上がる、直線に入るとすぐにギアを3速まで上げなくてはならなかった。時速はすでに70キロを越えていて、エンジンは唸りだした。

「速い！」その有無をいわない巨大な流れは、まるで自分が巨大な生き物の血管の中を流れているというような感覚にさせた。

ふと、頭の中で、上空のヘリコプターから自分を見ているような映像が浮かんだ、そしてそれは除久に上昇し、最後には日本全体を映し出した。幹線道路は時々車の窓ガラスとかに反射した光で、動いていみえた。

僕は経済のことなんてまったくわからないけれど、なんとなく日本が生きているという事だけは感じ取れた。

僕らは血管の中を流れる赤血球なり白血球なのだ、そしてトラックスは、今日も各細胞に必死でエネルギーを供給し、パトカーは悪玉菌を捕まえてまわっている。

平均時速は80キロをキープして、すべては順調に進んでいた。

今日はどこまでいけるだろうか？このままのスピードならきつと静岡まで行けるかもしれない、僕はそのことについて道路地図を見て確認しなければならないと思い、目についたコンビニに入ることにした。

幹線道路沿いには予想以上に多種多様なコンビニがあったから、トイレと休憩には困らなかった。

そしてお店にはいい、トイレにいつてゆつくり店内をまわり、パンとコーヒーを買った。いつもなら量だけがとりえの学生食堂でカツカレーでも食べているころだろう。

僕は、駐車場にとまっているバイクの横に腰を下ろし、その自由な気分を味わいながらコーヒーを飲んだ。

そして今日の予定を立てるべく荷物を空けてみた。

それは、突然竜巻のようにやってきて、僕の心の火を消し去って行った。

「あれ！？道路地図がない！」

僕は声を出さずに心の中でそう叫んだ、昨日確かに小さいほうのリュックに入れた記憶があるのに……。 (それも中部地方と関西地方の2冊)

もう一度落ち着いて、荷物の中を引っ掻き回してみたけどやっぱり見つからなかった、そんなに小さいものではないから後になってカバンの底から見つからないだろう事は容易に想像がついた。

「僕はいつたい、これからどうしたらよいのだろうか？」

もう一度コンビニに入って地図の値段を見てみたけど、中部地方の物だけで3200円もしたから、限りがあるお金を道路地図購入にあてることは、あまり現実的とは思えなかった。
結局、地図は買わずにコンビニを後にした。

それから、絶望感に浸りながら246を走りつづけていると、厚木という場所で、これから進んでいくはずだったコースを外れていることに気がついた、道路の幅が狭くなっていることを不安に思っ
てはいたのだけれど……、

道路標示の青い看板に、今いる場所が国道246ではないことを告げられると、血の気が引いた、何しろ道路地図をもっていないのだ！

僕はこの時ほど家に帰りたいと思ったことはなかった、そして昨日まで調子に乗っていた自分を恥じた。

一生懸命アルバイトをしてバイクを買っても、教習所について免許をとっても、タバコを吸って大人ぶってみても、結局僕はただの子

供にすぎなくて、たかが地図張が無いぐらいで泣きそうになっているのだ。

だけどその時、頭の中でまるで自分ではないような誰かが言った。
「落ち着け！感情的になるな、考えろ！できるだけ冷たく無機質に考えるんだ！とりあえず今俺にできることはなんだ？」

「僕にできること？」と僕は思った。

一瞬、自分が二人になってしまったような感じがしたけど、それはダブったというよりもむしろ、ぼくを形づくっている人格が「ブレた」といった感覚だった。

僕は俺であり、俺は僕なのだ。

「そうだ、なんとかなる、まずは本屋かコンビニを探すんだ！そこになら地図帳がある、そこで自分が今どこにいるのかを聞いて、246にもどる道を探そう、246に戻れば少なくとも家には帰れる。」

こういう時に限ってコンビニはなかなかあらわれなかったけど、焦って右左折を繰り返して探し回ったらもつと悲惨な状況になるかもしれないと思ったから、必ずあると信じてその道をひたすらまっすぐ進んだ。

そしてローソンの青い看板が見えてきた。

「よしっ！」

空回りしていたエンジンにゆっくりクラッチがつながったような気分になった。

さっそくお店に入って地図を立ち読みさせてもらうと、意外な事実が分かった。

なんと、今僕が走っていた道は（ジグザグではあったが）246とほぼ平行に走っていて、そのまままっすぐ行けば、あと300メートルくらいでもとの道に合流できるようになっていた。そして迷子になってからずいぶん長いこと走っていたつもりだったけど、結局

8キロぐらいしか走っていなかった。

なんのことは無い、最初から悩んだり、落ち込んだりする必要はなかったのだ！

僕は自分の信じた道を行くのが、いかに不安や苦悩に満ちたものであるかを学んだ。逆に言えば自分の信じた道が普通と違えば違うほど、悩んであたりまえなのだろう、だからきつとあきらめなければ、大抵のことなんてなんとかなってしまうような気がする。

でも切実にコンビニを捜し求めている時に、焦って探し回っていたら、もしかしたら永遠に厚木市から脱出できなかったように思えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3183a/>

少年の詩（風の翼編）

2010年10月18日13時42分発行